

生物はなぜ老い、そして死ぬのか — 命を見つめる臨床検査技師にお話したい事 —

◎小林 武彦

誰でも死について考えることはあると思います。特に医療に携わる方なら尚更その頻度は多いでしょう。ただ考えたところでいつも結果は同じで、「怖いな」「死にたくないな」と思い、特に解決策があるわけではありません。また自分と直接関わりがなくても、誰かの命が救われた場合には、「よかった」と嬉しくなります。死について、いつも深く考えているわけではありませんが、死に対する恐怖心は自身の行動の根底にある基本的な意識なのです。そして、死を意識することで、人として最も重要な「生きることの価値」を共有しています。

「死」は一体なぜ存在するのでしょうか？

生物は長い年月をかけて進化によって作られました。綺麗な花であったり昆虫であったり、観察してみると細胞の中身に至るまで、非常に良くできています。自分自身の体もそうです。手は楽器を演奏したり、字を書いたり、ものを作ったりできます。足は走ったり、踊ったり、ボールを蹴ったり。自分の体で空を飛ぶ以外のことは、ほぼなんでもできそうです。しかし残念なことに、これだけ精巧に作られているのに最後は必ず壊れます。つまり生物は必ず死ぬのです。こんなになんでもできるすごい体を作れるのなら、なぜ死なないようにはできなかったのかと思ったりもします。逆に言えば「死は生物にとって絶対に譲ることができない必須なこと」なのだと考えることもできます。死の前に訪れる老化もそうです。老化は主にヒトにみられる現象ですが。こちらも必要があって存在します。本講演では、死と老化の生物学的な意味について、皆様と一緒に考えてみたいと思います。